

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：27401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K13061

研究課題名(和文) New Multicultural Pedagogy in Classroom in Japan and Canada through Writing and Filmmaking

研究課題名(英文) New Multicultural Pedagogy in Classroom in Japan and Canada through Writing and Filmmaking

研究代表者

原 紘子 (Hara, Hiroko)

熊本県立大学・文学部・准教授

研究者番号：00707870

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多文化主義政策をとるカナダの高等教育に鑑み、日本における地球市民権の概念の醸成と多様性理解・多文化共生を目指す教育との関連性に着目し、それらの教育目的の達成に貢献しうる新たな教育モデルの提案を試みた。まず、日本とカナダの両国において、地球市民権の概念の醸成と多様性理解・多文化共生を目指す教育の現状を明らかにするため、文献調査を実施した。次に、映像制作プロジェクトを立ち上げ、大学生とともにショートフィルムを制作した。本来は複雑で理解しにくい多様性の概念を視聴者にわかりやすく表現した映像作品が完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から生まれたショートフィルムは、日本およびカナダで開催された学会で上映され、デジタル社会におけるビジュアル調査法を用いた新しい試みとして高評価を得た。また、映像制作プロジェクトは、それに携わった学生の満足度が高く、活動を通して学生自身に気づきや発見をもたらす有効な教育方法となりうることが示唆された。本研究が示した高等教育における新たな教育実践例は、多様性理解と多文化共生の推進に貢献しうると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Applying visual research methods, this study investigates how various actors in higher educational institutions in Japan and Canada articulate the concepts of global citizenship and multiculturalism, and how their actions have relevance to the enhancement of diversity. I analyzed the data collected through document analysis, interviews, and surveys in Japan and Canada. In addition, I collaborated with university students in Kumamoto and produced a short film articulating the notion of diversity. The findings from this research project suggest that filmmaking in the classroom has the potential as a new multicultural pedagogical approach that can accommodate and promote diversity among teachers and students.

研究分野：教育学

キーワード：global citizenship multiculturalism visual research methods filmmaking

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進行する今日の世界では、国境を超えた人・モノの移動が活発である。多様なバックグラウンドをもつ人々が社会やコミュニティを形成する現状において、人々の多様性を認識し尊重することが円滑な社会生活を営むうえで重要になってきている。そこで、民族や人種、ジェンダー等の多様性についての理解を促す重要な要素の一つとして、地球市民権 (global citizenship) の概念が挙げられている。多文化主義の政策をとるカナダでは、地球市民権の概念の醸成に向けた先駆的な取り組みが教育現場で行われており、多様性理解、ひいては多文化共生を推し進めようとしている (Cabrera, 2010; Trilokekar & Shubert, 2009)。

この多様性理解および多文化共生の推進への取り組みについては、日本もその例外ではない。文部科学省の『平成 30 年度文部科学白書』では、高等教育におけるグローバル人材の育成と多文化共生社会の具現化の必要性が示されている。しかし、カナダとは異なり、地球市民権の概念の発達と多様性理解および多文化共生に向けた教育との関連性には、日本ではほとんど注意が向けられてこなかった。

### 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では日本とカナダの高等教育に注目し、以下のリサーチクエスチョンを設定した。

- ・地球市民権の概念の醸成と多様性理解・多文化共生を目指す教育とは、どのように結びつくのか。
- ・日本における多様性理解とグローバル人材の輩出を促進する多文化教育の理想的なモデルとはどのようなものか。
- ・そのような新しい教育モデルを実践した場合、教員と学生に対してどのような効果があるのか。

本研究では、上記の問いを考察し、新たな教育実践例を示すことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、国家や文化、民族、言語などの境界を超え、さまざまなバックグラウンドをもつ人々が共存することのできるハイブリッドな空間が存在するとする Trinh (1994) の空間理論に倣い、多様な構成員 (教員・学生) が集まるクラスルームをそのような空間とみなすこととした。

日本とカナダの現状を把握するため、両国において地球市民権の概念の醸成と多様性理解・多文化共生を目指す教育に関する文献調査を実施した。さらに、ビジュアル調査法 (visual research method) を採用し、多様性の概念を視覚化するための映像制作プロジェクトを立ち上げ、熊本の大学生とともにショートフィルムを制作した。『Sōseki in Our Life (私たちのくらしの中の漱石)』と題された映画を日本とカナダ両国で上映し、観客にアンケート調査を行った。また、日本とカナダそれぞれの高等教育および多文化共生教育の専門家である大学教員にインタビューを実施した。このような理論と調査方法を用いて、上記 3 つの問いを探究した。

### 4. 研究成果

本研究では、Trinh (1994) の提唱するハイブリッドな空間 (hybrid space) 理論を適用し、文献調査やアンケート、インタビュー、ビジュアル調査法などの複数の調査方法を組み合わせることで、前出の「研究の目的」で挙げた 3 つの問いを多角的に考察することが可能となった。

第一の問いである「地球市民権の概念の醸成と多様性理解・多文化共生を目指す教育とは、どのように結びつくのか」の解明には、アンケート調査が有用であった。大学生と制作した映像作品を日本およびカナダで上映した後に実施したアンケート調査では、観客 (被験者) の回答から、「地球市民権」や「多様性」という言葉にさまざまな解釈が存在することが明らかになった。また、上映作品についての解釈も多岐にわたった。例えば、熊本出身の学生の中には、生まれ育った地域の映像を観て親近感を抱いた者がいた一方で、カナダで生まれ育った学生の中には、抱いていた日本のイメージとは異なる描写に戸惑った者がいた。これらの結果から、多様性を視覚化した映像作品が視聴者の多様な考え方の表出に役立つこと、そしてそれを多様性理解と多文化共生を促進する実践的な教育方法に取り入れることができる可能性が示唆された。

第二の問いである「日本における多様性理解とグローバル人材の輩出を促進する多文化教育の理想的なモデルとはどのようなものか」について探究するうえで、日本とカナダそれぞれの高等教育および多文化共生教育の専門家 (大学教員) の識見が参考になった。両国の大学教員から話を聞くことで、多様性理解・多文化共生に向けた教育の現状や課題が明確になった。カナダの大学教員によると、「多文化」という概念は複雑であり、さまざまに解釈されているという。例えば、「interculturalism」という用語が使用される場合は二つの文化間というニュアンスが含まれており、「multiculturalism」という用語の場合は複数の文化の混合という意味合いがある。さらに、日本からグローバル人材を輩出するために、教育現場では学生に地球規模の課題を批判的思考を用いて考察させる機会を増やすことなどが重要であるとの指摘があった。日本の大学教員によると、日本社会の構成員も多様であり、多文化教育を推進するカナダの政策から学ぶべき要素があるという。また、日本において多様性の理解やグローバ

ル人材の輩出に向けた教育を実践する際に教員に求められるのは、授業内容を十分に吟味し、学生が安心して発言できるような環境を作ることであり、学生自身も受け身にならず積極的に授業に関わることが必要であるとの意見があった。このように、文献調査だけでは見えなかったことが、専門家の生の声によって浮き彫りになった。

第三の問いである「新しい教育モデルを実践した場合、教員と学生に対してどのような効果があるのか」については、大学生と実施した映像制作プロジェクトがその実用的な回答事例となり得る。本研究の研究代表者とそのゼミナールに所属する11名の学生とでショートフィルムを制作した。映像制作プロジェクトの第一段階として、「文化とは何か」というテーマで議論し、熊本の文化についても考察した。ゼミでの学習を進めていく中で、熊本にゆかりのある文人として夏目漱石の名が挙げられ、彼の作品や生き方を深く掘り下げていくことになった。夏目漱石が英語で記した短編作品を読み込み、それについて分析・議論を行なった。学生一人ひとりが夏目漱石の作品や生き方に関連したキーワードを決め、スマートフォンのカメラ撮影機能を使い、そのキーワードを映像化した。11名の学生が撮影したそれぞれの映像を、本研究の研究代表者が映像編集ソフトを使って一つの作品にまとめた。さらに、学生たちは熊本の若者文化の一つの要素である熊本ことばを使った文章を作成し、ナレーションも担当した。これはナレーション（声）を通して、日本における方言の多様性を示すことをねらったものであった。また、メッセージを幅広い層へ届けるため、学生が英語のナレーションも担当した。

映像制作プロジェクトに携わった学生の満足度は高く、地元では当然のものとして捉えられていた熊本ことばや地域文化を見つめ直し、考察を通して新たな発見があったと述べる学生もいた。このことから、新しい教育モデルとしての映像制作プロジェクトは、学生の学びにおける気付きや発見を導く可能性があると考えられる。11名の学生が撮影・録音した映像・音声を結集した映像作品は多様性の概念をわかりやすく表現しており、視聴者一人ひとりの自由な解釈を促し、まさに Trinh (1994) の提唱するハイブリッドな空間を創造している。

また、本研究の一環である映像制作プロジェクトは、昨今、その有効性が指摘されているアクティブ・ラーニングの一例といえる。アクティブ・ラーニングとは、教員と学生に対し、一方的に知識を伝授する伝統的な指導・学習法を超えるよう促すものである。この新たな教育法を授業で実践するには、教員と学生双方の努力が必要となる。教員は学生たちの自主性や気付きや発見を促すため、柔軟性を持ち、ファシリテーターとしての役割を果たし、教室内にポジティブな環境を作ることが求められる。学生は居心地の良い場所から出て、自身の意見を述べながらも異なる考えに耳を傾ける必要がある。教員も学生も多様性を受け入れやすい寛容な共有空間をはぐくむ必要がある。本研究の映像制作プロジェクトから明らかになったことは、教員の努力と学生の努力が反応し合ったとき、ハイブリッドな空間が生じるということである。

本研究から生まれたショートフィルムは、国立民族学博物館での学会（2019年4月）およびカナダのプリティッシュ・コロンビア大学で開催された学会（2019年6月）で上映され、ビジュアル調査法を用いた新しい試みとして高評価を得た。本研究の一環として実施された映像制作プロジェクトは、高等教育における新たな教育実践例であり、多様性の理解と多文化共生に向けた教育に貢献しうると考える。今後は、授業の中に映像制作を取り入れたさまざまな実践法とその効果について、さらに探っていく必要がある。

## 引用文献

- 文部科学省. (2018). 『平成30年度文部科学白書』. 2020年4月16日アクセス  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab201901/1420047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/1420047.htm)
- Cabrera, L. (2010). *The practice of global citizenship*. Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press.
- Trilokekar, R. D., & Shubert, A. (2009). North of 49: Global citizenship à la canadienne. In R. Lewin (Ed.), *The handbook of practice and research in study abroad: Higher education and the quest for global citizenship* (pp. 191-211). New York, NY: Routledge.
- Trinh, T. M. (1994). Other than myself/my other self. In G. Robertson, M. Mash, L. Tickner, J. Bird, B. Curtis & T. Putnam (Eds.), *Travellers' tales: Narratives of home and displacement* (pp. 9-26). New York, NY: Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 HARA Hiroko	4. 巻 26
2. 論文標題 Participatory Cellphilmimg as a New Pedagogy for Diversity	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://ci.nii.ac.jp/naid/120006841577">https://ci.nii.ac.jp/naid/120006841577</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 HARA Hiroko	4. 巻 16
2. 論文標題 A New Multicultural Pedagogical Approach: Participatory Filmmaking in the Classroom	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文彩	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://ci.nii.ac.jp/naid/120006843154">https://ci.nii.ac.jp/naid/120006843154</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Unpacking What is Hidden: Participatory Filmmaking with University Students in Kumamoto
3. 学会等名 Anthropology of Japan in Japan (AJJ) Spring Workshop
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 A New Pedagogy towards Promoting Diversity: "Cellphilmimg" in Japanese Higher Education
3. 学会等名 Canadian Society for the Study of Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----